オレにも言わせろ！
北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

Vol.93 熱烈歓迎 ヒール宮井先生！



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

前号ハノーバー農機展の続きだ。

農機展が終わり、ハノーバーから南に45分くらいに位置するババリア地方の古都ゴスラーに向かった。農場主ヘニングは1978年に北海道本別に一夏研修したビール大好きのオヤジである。彼と会うのも6回目くらいになるので、お互いの気心はわかっている。

そのヘニングがL社のカルチベーターに愚痴をかました。何でも作業機前方に装備されたマーカーが、折りたたみ時にクラース・トラクターのフェンダーに当たってしまうとL社のセールスに伝えたら、「フェンダーに当たらないトラクターに交換することを勧める！」と暴言を吐いたそうだ。さすがレムケン・クオリティーだ。

小作人根性のまま似非ボスになった挙句

彼に近隣の農家を紹介してもらった。名前は忘れたが、興味深い話をするオヤジだった。私の農場の作業風景をユーチューブで見ながら長沼で栽培している作物や農地の価格を説明すると、彼がこう質問した。

「私はこの地方で11代目の農家でやっと60haにすることができたのに、**なぜミヤイさんはたったの3世代目で私よりも大面積にすることができたのですか？**」

さー困った。人よりも努力したから？　それは違うなと感じていたので、こう答えた。

「戦争に負けて小作人根性を持った生産者が発言できるようになった。その数は戦前の10倍だ。その後、幸か不幸か70年で小作人根性を持った者とその遺伝子を引き継ぐ者の多くは農村から都市に向かった。そこではあいかわらず小作人根性同士しか理解できない文化圏を作り、規模拡大が歴史的必然なのにそうさせなかった。その理由は小作人根性を持った人たちに聞いてみないとわからないが、たぶん農政を信じないで自分のやり方やアンチ・アメリカ的なユートピアを信じた結果だと思う。だが私の祖父、父、私は豊かさを目指す日本の農政を信じたので、社会主義的な前頭葉を使う農業は行なわなかったから。たぶんそれは冷戦後の東ドイツ農業と似ているのではないか」

すると彼は、「たしかに東ドイツはソ連の影響で集団農業に力を入れたので、全員が小作人なのにボスになった。ベルリンの壁がなくなった後、西の農業文化が入り込み、似非ボスのほとんどは農村を離れて都市住民になった」と返してきた。

ヤーパンをなめたG社の未来

翌日ゴスラーを離れ、ポテト関連メーカーのG社に向かった。

なめられたもんだ。あまりにも工場ガイドがイヤイ

ヤ状態。たいそう気分悪くさせていただきました。ツアー参加者にはこのG社のハーベスターを使っている者もいるし、事前に工場ツアー予約をしているのに完璧にヤーパン（ジャパン）をなめた態度ありありだ。

工場のボードにはKAIZENの文字があり、意味を知っているのか聞いてみた。ガイドはこう言った。「知らない」。**チーン、はい終了、G社の未来が見えました。**

オランダの農業学校で教鞭を執る

その後オランダに入り、ハノーバーから同行してくれたヤンの自宅に向かい、奥様のサーキャの夕食をいただいた。このパターンは毎回なのだが、彼女の作るスープは絶品だ。今回のトマト系とベーコン系は質素ではあるが、オランダの一般家庭の温かさを感じるテイストだった。

ヤンの息子ニックから自分の学校に来て、日本の農業を話してほしいと依頼を受けた。担任の先生も乗り気だという。ということで朝8時過ぎに学校に行き、打ち合わせもなしでニックの教室に向かった。そこには18歳の生徒が20名くらいいて、ヒール・ミヤイ先生が30分ほど教鞭を執ることになった。

まずは歴史だ。ポルトガルからフランシスコ・ザビエル、その後オランダがやってきて、ヨーロッパの文化を日本に普及させたが、裏ではキャソリックとプロテスタントの覇権を目指す宗教戦争があり、結果としてオランダが勝ったこと。それまでの東洋医学から西洋医学をシーボルトから学んだが、彼はドイツ人だった、と言うとウケてくれた。

そんな長い良好な関係も第二次大戦でお互いに敵国になるが、パールハーバー奇襲と違い、日本側からオランダに宣戦布告はしなかったことを学生に伝えた。詳細はウィキペディアで調べてくださいと言うと、これまたウケてしまった。

平均面積はこのくらいで、トラクターはこんな感じでと、農場のユーチューブを見てもらっていると、ある女子生徒が「**GM作物はどうなっていますか**」と来たので、「日本はコーン1500万t、大豆300万t、その他ナタネ、コットンなどGMをガンガン輸入してますよ。もちろん輸出国と日本政府の安全審査は通っています」と事実を伝えた。

農業学校では12～16歳と17～20歳のコースがあるが、気になったことがある。女子生徒が3割程度しかいなかったのだ。農業先進国と言われるオランダでも、日本の学校と同じ男女の比率のようだ。

最後に生徒には「勉強しなさい、働きなさい、そして税金を払いなさい」と発破をかけた。

食い物の恨みは大きいぞ

その後、一行は8時間かけてドイツ南部のミュンヘンに向かった。私は行かなかったが、参加者は深刻なトラブルに遭遇したそうだ。

ミュンヘンから1時間15分ほどのところにFトラクター工場があり、事前に常呂の生産者が工場ツアーの申し込みを日本の販売店M社美幌営業所の鈴木さん経由でお願いしていた。ランチは有料になると事前にM社から聞いていた。

出されたものはスナック菓子1袋にコーラが1本で、ご奉仕価格の無料だった。工場ツアーから帰ってきた3人は「腹減った」の連呼。なぜ約束と違うと主張しなかったのか？と聞いたところ、そこまで言えなかったとのこと。何とも控えめなヤーパンである。

私は「それってペロッとなめられたんですよ。4年前のJ社工場ツアーは幹部食堂でしたよね。今後も**そんなFトラクターを買いますか？**」と煽った。トドメは「あいつらはヤルんです。弱みを見せると集中攻撃です。それがドイツ社会なのです。アメリカ人だともう少しわからないように上手にやりますよ」

私のランチは1人でトルコのケバブ、夕食はチャイニーズだったが、F社工場参加者はこう思っているかもね。

「食い物の恨みは大きいぞ、フェント工場ガイドのヘルガ・ハリエスさん！」

10日間で走行距離3000kmを超えるツアーとなったが、その間に渋滞や交通事故に遭遇した。

だめだ、あれは。警官がまったく働いていない。パトカーから出てくる気配もない。手前の出口に誘導するとか、迂回路の案内もない。よく見渡せば速度無制限のアウトバーンには街灯がないところがほとんどだ。ほとんどの都市は渋滞がひどいのに、町並みはきれいという評価？

ところで道中、日本でも**有名なドイツの国民車と言われたビートルを何回見たと思います？** 2回だけ。BMWのミニに至っては1回だけだ。両者には共通項がある。車幅よりも室内幅が明らかに狭い。

さすがのドイツ人もお金を払ってこんな狭い車を買おうとはしないのが現実である。ドイツ品質だと喜んで買うやつが東アジアの隅にいることを、ドイツ人はさぞかしビール腹を抱えて笑っているだろう。